

「私たちの生活は COVID-19 によりどう変わったか

＝ 子どもの世界を中心にその移ろいを考察します」

柏原 誠

導入

COVID-19 により私たちの生活は全く様変わりをしてしまいました。ヨーロッパでの変化の代表と言えることは、マスク着用が普通になったことではないでしょうか。ダイヤモンドプリンセス号が横浜に停泊して世界の注目を集めていた頃は、ベルリンではまだ今で言うところの「かつてそうであった通常生活」が営まれ、COVID-19 も対岸の火事程度に考える人が多かったと思います。記録を辿ると 2 月 26 日には小学校の保護者会が開催されていましたし、マスクを入手した子どもは学校で飛び上がって自慢して見せびらかしていました。あれから比較すると 8 月になったベルリンは大きく生活仕様が変わりました。振り返ってみると目まぐるしく変わる社会状況は仕事の上でもそうでしたが、生活全般で見ると思春期の女の子と小学低学年の息子を持つ家庭としては、子どもの生活変化に大きく影響を受け、家庭内が子ども中心に変わったといえます。親の都合で動いていた家族が子ども中心になりました。奇妙な話ですが、子どもを持つと子ども中心の生活になる、そしてそういう生活をしている、と思っていた今までの「子ども中心」は「親が考える子ども中心」であり、「実働の子ども中心」では無かったことに気づき、今までの「子ども思いの良い親である」という自身のおごりを反省させられました。今回は COVID19 による生活の変化を、そんな子どもの生活を中心に振り返ってみたいと思います。

初期（3月-4月）

3 月に入り少しずつ COVID-19 関連の情報や注意喚起、手洗い推奨や少しでも体調が悪ければ休みましょうなどのメッセージが発せられるようになりましたが、依然として学校登校は毎日行われていました。しかしそんな注意喚起発信の数日もしないうちに 3 月 13 日に急転直下です。3 月の残り 3 週間と 4 月初めの 2 週間のイースター休暇を含め計 5 週間の休校？ 休暇？ となりました。この時、世間での通称は「コロナ休暇」でした。まだ呑気なものでイースター明けには登校できるものと皆が思っていました。しかしさすがに 3 週間もの間、何の勉強もしないのはよくないということで、オンラインにてその週の課題が出されるようになり、それを親が印刷をして子供にやらせてチェックをする方式が取られました。しかし子供は「コロナ休暇」の気持ちで全く学習意欲はなく、親が即席家庭教師となりました。一方仕事を持つ親の方は自身の仕事でも在宅勤務が始まりました。子どもが 1 日家にいて退屈と不平を発し続ける上に仕事＋家庭教師をすることとなり、学校の有り難さを痛感しました。また 3 月下旬にはドイツ全土での接触制限（外出制限）も始まり、外にも行けない、以前の息子は毎日サッカー漬けの生活でしたが、それもできなくなりエネルギーを持て余した猛獣との生活が始まりました。

4月に入ると少し対人制限措置にも慣れた生活になり、対人接触がなければと言う前提で外出の頻度も上がりました。近くの広場（公園は使用禁止）に人が集まるようになりました。そこへ行けば数人の知った顔がいるという暗黙の了解が成立してきました。仕事を夕方に終わると息子とともに広場に行き、キャッチボールをしたりサッカーのパスやリフティングをしたり、縄跳びをしたり、サッカーのチームメートの家族も来たりで、個人の活動ではありますが運動をする集団が出来上がって、通勤仕事をしていた時よりも健康的な毎日を過ごし、実際健康になりました。体を動かし汗をかくと、やはり心も健康で安定した家族生活の4月でした。



それぞれが対人距離を保ち、屋外の時間を満喫して健康維持に努めています

中期（5月-6月）

4月イースター休暇が終わった後も登校はできず、課題をこなす日々となりました。子どもたちも学校のない生活に慣れましたが、息子の勉強は一向にはかどらず、低空飛行でした。登校授業ができない影響により、「今学期の成績は前回の成績より下げて評価してはいけない」との教育相の通知があり、子どもたちというより親が課題消化に目くじらを立てなくなったのが家庭内不協和音の改善につながりました。クラスによってはオンライン授業が行われていましたが、息子のクラスでは課題提出形式だけでした。一方日本語補習授業校とプライベートのチェロのレッスンがオンラインで行われました。通常どちらも気が進まず嫌がる息子もオンラインでは楽しく過ごせるようで、いつも次回を楽しみにしていました。COVID-19が少し落ち着きチェロの対面レッスンが再開された際には、今まで「もうやめる」と決めていたチェロを再び続ける意思を固めました。余程対面で音を出すのが楽しかったのだと思われます。

この頃になると業務も少なく、特に国際交流を主とする私の仕事は先の見えないトンネルに入りました。なんとかCOVID-19後を見据えた活動などに考えを巡らせますが、如何せん現状として人の動かない国

際交流に自身の存在意義を疑い出すという不健康な状態に突入し、と同時期に制限付きで不自由さがありますが、サッカーの練習が再開され、広場へ通う生活も終わりとなって運動量は減り、心身ともに不健康な状態となりました。ほぼ子どもの日課を追う親の生活に戻りました。ちなみに思春期の長女はさすがに親の手はかからず、元々緩い生活であったために学校に行かない生活で朝の長寝を満喫でき、スマホやオンラインでの友達とのコンタクトが一日中可能になったこともあり、自宅生活を満喫していました。もともとの性格もあったかと思いますが、ゆったりした自宅生活により、登校している生活よりも安定した思春期ぶりを見せてくれました。

6月下旬にはベルリンの夏休みが始まり、親の不健康な状態とは裏腹に子どもたちの健康的な生活が始まりました。



飲食店も再開し、客席は隣席との1.5mの距離を取って配置がスタンダード

後期（7月）

ドイツの夏の夏休みはその後新学年になることもあり、宿題がありません。最も全ての休暇に宿題はないのですが、子どもはかつて私が過ごした昭和の子どもがそうであったように毎日日が暮れるまで外で友達と遊ぶ日々を過ごしました。安全上小さい子どもの登校に親が付き添う習慣のベルリンですが、低学年の子供だけで遊び回る光景が広がりました。私にとっても子どもにとってもそれは非常に新鮮で、子どもはこうあるべきだ、というのを体現するかのように自由を満喫し、真っ黒に日焼けして汗びっしょりで帰ってくる毎日でした。かつては子どものためと思って子どもに付き添い運動をする毎日が、実は親が外に連れて行ってもらっていたのだと、考えが反転した時期でした。あの頃は放っておいてもWHO推奨1万歩/1日がクリアできていたのが、これほどまでに1万歩歩くのは大変なのかと痛感しながらの散歩の日々でした。

現在（8月）

公共交通機関利用時と不特定多数者利用施設内はマスク着用が義務になり、かつ対人距離の1.5m 確保は社会的に浸透しました。夏休みが終わり学校も始まり、行動の制限は多少あるものの毎日登校する日常が帰ってきました。COVID-19 の長期化での慣れもあるかと思いますが、夏の快晴のもと、気持ちの落ち込みも少なくなった気がします。室生犀星は何かの小説で、「人の気持ちはお天道次第」というようなことを書いていたことを思い出しました。

まとめ

子どもに振り回され、面倒を見ていると思って行動していたことが、実は私の心の平穏を保てた拠り所であったのだと今となっては振り返ることができます。子どもには感謝です。自身の仕事の意味や業務の価値など考えさせられる時期でもありました。オンラインにより世界のどこでも繋がれることを体験し、お互い近所にいながらオンラインすること海を挟んだ人同士がオンラインで会うことの違いがなくなったと同時に、実際に対面することは何なのだろうか、と意味や意義を深く考えさせられました。オンラインの2D上で情報の交換をしつつ、実際に対面することによる同時多方面交流でしか得られない体験を通じた自己変革が今後の交流になっていくのかと思いました。以前は不変な自分を作ることで自信と自身を確立していくことだと思っていました。しかし COVID-19 に絡めとられる生活を通して、情報は時間と場所を超えてつながり不変ではありますが、人は変化に富む状況に迅速にかつ最適に対応することが最も大切なポイントだと感じました。COVID-19 による社会活動制限下に考えたこのようなことを基にして、国際交流とは何かと考えた時、その答えは人の変化を促すその着火材だ、と表現できるようによく考えが至りました。

柏原 誠（かしわばら まこと）

Charité - Universitätsmedizin Berlin にて公衆衛生学修士取得。同大学 International Cooperation 勤務。

JAMSNET 東京事務局員、2014 年に JAMSNET ドイツを立ち上げる。

2000 年よりドイツ在住。現在 16 歳と 10 歳の子どもと妻の 4 人でベルリンで暮らす。COVID-19 により 2D と 3D のコミュニケーションの世界観が変わり 2D と 3D の世界が融合し、物事を 5D で捉えることが必要であると考えが至る。次世代移動通信 5G に対抗する次世代人間交流 5D を提唱する。